

東京天文台人工衛星観測所，ラ・サールに於けるの記

山口 志摩 雄*

我々2人，東京天文台の香西洋樹氏と地元ラ・サール学園の私は梱包の音を背後に聞きながら屋上から地上を眺めていた。1974年3月6日のことである。これは1962年以来，満12箇年にわたる谷山観測所の最後の期であった。2人は黙っていたが同じ事を心に描いていた。開発と呼ぶ姿である。東京天文台がこの観測所を設置された当初，我々が今立つこの理科館は未だ無く，この場所は浜辺，冬の夜にカノープスは光の条を落していた。今頃は麦の緑と菜種の黄色の上でヒバリが鳴いていた。我々の眼前には車の流れが絶えることを知らず，塵霧は銀河を消して了った。我々は15mの高さから眺めているが，もっと上空からこの10年間の変化を見守っていたならば灰色のカビの聚落が緑の大地を侵蝕してゆく様を如実にとらえたであろう。微生物を取扱うとき，自浄と云う用語を使うが勝手に殖えさせておけば滅菌と同じ結果となる。既に人類は自発的に絶滅への途をたどり，骨は脆く，脳は弱くなった。この縮図とも云うべき変化を我々2人はこの土地で体験した。人生の愚劣さにうんざりしている身にとって天文台とのお付き合いが如何に貴重なものであるかを私は今しみじみと味っている。

1961年も暮れ近い日，東京天文台の富田弘一郎氏から封書を受け取って私は驚いた。用件は，人工衛星は実用段階に入り，天文台では測地の目的で此度観測基地を設置する計画，九州では貴校を選ぶことにした。承諾さえあれば器材一式を送るから指示通りに撮影・現像した乾板を返送してもらいたい。唯それだけの事であるから承知してもらいたいとの事であった。私は誰とも相談せずに，きっぱりお断りの返事を出して，せいせいした。私にはそれなりの理由がいやと云う程あった。人工衛星の災難はもう一切ご免であった。

Moon Watchなる名称は既に紙屑籠に入ってしまったが地球観測年以來，日本でも天文アマチュアが動員された一時期があった。旭川がNo.1，鹿児島がNo.61であった。最初，人数は多かったが望遠鏡が乏しく，数年後に米国からエルポー・アポジーと続々送られてきたときには人影疎らにして各班の班長の眼だけになっていた。No.61は地理上の関係で被害は甚大であった。特にエコ衛星(1960年)打上げの半年程以前から8888計画なる国際的な秘密を守らされて，私はノイローゼになっていた。面白くないのである。

ところが，天文台からまた手紙が来た。貴方の事情は了解した。観測員を出張させるから唯，観測の場所だけを提供して欲しいとの事。最早，断りの口実は無くなり，1962年早々，実施の運びとなり，下保・平山の両氏が来校された。お泊り，お食事と走り廻ったあげく校医の川畑先生の病室に臨時入院と云う事に，ぜひぜひとお願いした。この病院宿舎には当時の天文台長広瀬先生にもお泊り願った。

観測は最初，校庭のテント張りで行われたが見物人がうるさく，特に留守中のお守りが大変であった。どこか屋上にとさがし図書館上に決め，松の幹や枝を切り，生徒の不法侵入を防ぐために庭からの梯子を脱してお移りを願った。このため，観測員の香西氏はまるで刑務所の監守よろしく鍵の束をがちゃつかせての出入りであった。同時に観測地点の測量，これが実に難事業であった。これは我々にとって誠に有難いことには1/100秒の単位で経緯度が決った。その後，もう一度，お引越を願った。海辺に理科館が建ち状況が勝れていたからであった。丁度1964年1月26日，谷山を通る掩蔽(双子座η)観測に出張された竹内・真鍋・大橋諸先生御立会い下さった。そしてその移転先が今日，最後の日まで観測地点となった。

下保さん設計に成る観測小屋は器材設置の建物本体と可動式の屋根，これを支える支持部の三部から成る。特に当方から願ってポールトで土台のコンクリート部と固定されていた。その移転である。正直なところこの引越は半分，我々学校側の都合もあるから移転経費は最少

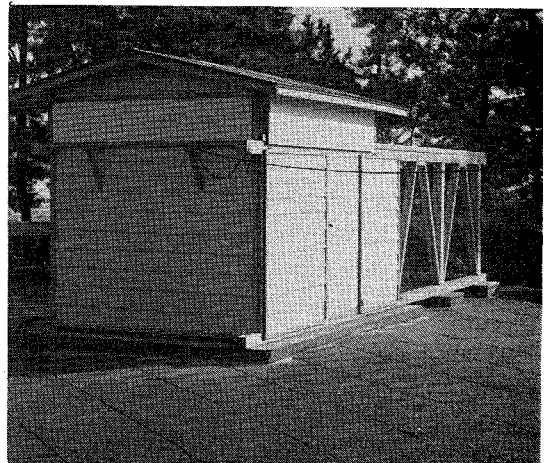


写真1 図書室屋上(移転前)

* 鹿児島ラ・サール学園

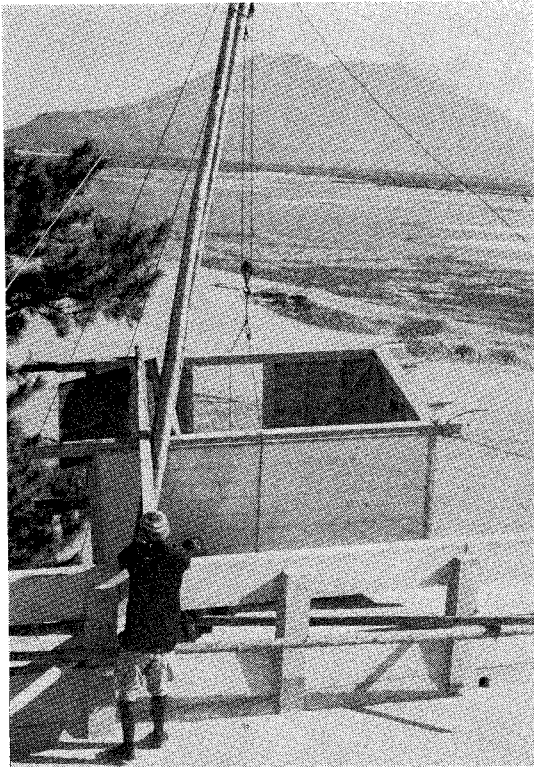


写真 2 移転作業中（理科館屋上へ吊上げ）

限に止めたかった。K組の責任者自らこの仕事の重要性を充分に認識して見積書を持参した。うやうやしく提出されたその金額を一見したとき、私は無い知恵を絞る時が来たことを知った。この建物が今から果そうとしている重要性和同時に天文台の会計は決して豊かでない事、従って此度の仕事は一般の営業の範囲から脱して考慮してもらいたい事を手短かに話した。相手は黙って例の見積書を引込めると私の顔を見て云った。「値段は先生、あなたが決めて下さい」。ではこれで願いますと私が提示した額は見積書の1/10、天文台から内示された最高・最低の中間であった。元来、無理強いが利く機会は一回限り、そしてまた複雑な人生の網目に生きる我々にその一回は極力避けなければならない。立ち上ろうとする対手をとどめて云った。ご無理はお願いしたがご損を掛けるつもりにも毛頭ありません。ご計画は有難くも広い足場を組まれ、二階から降して三階屋上へ持ち上げようとするらしいが、大切なのは内部の機械類、これは人間の肩を借りたいが建物は三部に解体して1本のロープと滑車で吊り下げ、吊り上げようではありませんか。万一、ロープが切れて落ちたときの責任は私がとります。ナニ、カスガイを4、5本たたき込んで筋交いをかませようではありませんか。我々2人がもっと若ければ別の表現で別れたであろうが唯「判りました」と相手は慎ましく帰っ

て行った。私はホッとするとたんにこの事を忘れていると或る朝、世の中がさわがしいので窓から首を出して見ると着工であった。授業のあい間に屋上に出てみると観測小屋は分解され縄がかけられていた。竹内先生はじめ天文台の先生方はそろって見学中であったが肝心の香西さんの姿が無い。昨夜、病院で40度以上の熱を出されたとかである。仕事の指揮をとっているのはトビ職であった。天文台のお偉い先生方は一々、あの縄の掛け方、あの力の角度等々と真面目に感心されるので作業員の得意さはいやが上にも嵩じ、トビ職の意気は天井知らず、「ヨシ来た。ブーと押しシャイ」と必要以上の大声を出す。移転先の屋上には器械類が肩で登って来る。架台基部のアサガオを力自慢の大男が独力で担ぎ上げ、火事場の金時よろしく晒然と見る我々の真中に馬鹿丁寧にと降す忠実振りである。気が付くと香西氏は熱が半分下ったとかで手術直後の喉からハーハー痛い声で笑って見物中であった。新しい土台に太いボルトを締めつけて終わった。この小屋は錦江湾に君臨した形で桜島と対峙していた。

その後、事もなく順調に歳月は流れたが唯一回、1965年、台風第15号で屋根の留め金が折れ、カメラの一部を損傷した。風速40mを越したときの建物の絶叫は実際に聞くに耐えず、今更ながら我々は斯程まで濃厚な大気中に住んでいたのかと痛感させられる。

この新しい観測所は痛く香西氏のお気に召し、二段ベッドを我々の観測室に持ちこんで悠々自適されることになった。或る夏の日、同氏は若い台員一人を残し脂ぎっ

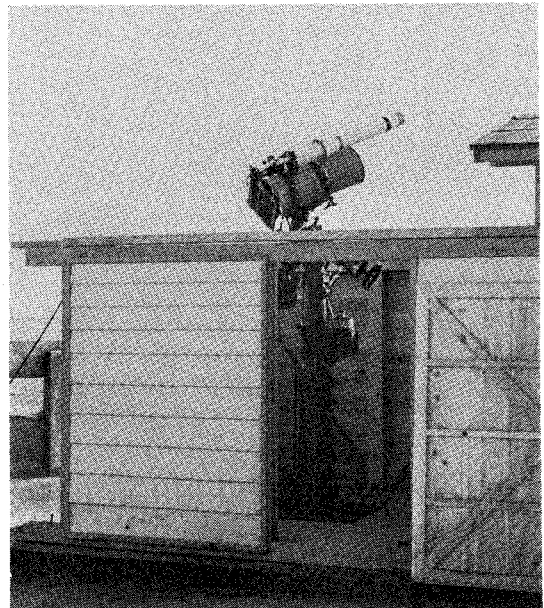


写真 3 カメラとガイドスコープ（理科館屋上）

て帰京された。我々は安心して休暇に入ったが或る日、香西^{トリブ}岩に独り残された勇士は如何かと、若い同僚とのぞきに上って見ると摂氏 40 度以上の屋上で水浴中であった。水色のポリタライに納まっている人体はどうも少々変っているのでよく観察するとおへソが背骨に喰付いていた。大いに驚いて衣服を着せ、人里へ引き降した。以後お若い方の来訪は絶え、適応性大な香西氏の独り舞台となった。横目でみればその香西さんの漆黒の髪に白髪が目立つようになった。斯く申す私は全身に老衰の兆候鮮かに、その火葬の期も亦近い。

今、我々の前方 50m を流れてやまないこの車道は我々の目下を通る予定であった。学校の死活にかかわる事と全力を尽したが私立校の泣き声に耳をかす鹿児島ではなかった。この香西氏のご尽力によって当時の広瀬台長のお墨付きをいただいて交通公害からラ・サール校は救われた。思えば有形・無形の恩恵を数知れず忝けなくした。生徒達はこの小屋を誇りとしていた。私は彼等を絶対に近づけなかった。「お前達は地上から拜んミヤイ」である。断絶と云う落差が無ければ教育と云うタービンは回転しない。勿論それは魅力の範囲内のことではあるが、この10数年を省みて「仕事をする者には、こちらから膝を屈して席を提供せよ。去ったその後も業績は跡を残す」。若いとき聞いた教訓は実証を以て今此処にあ

る。

兎もあれ明日、天文台を代表して古在先生が学校当局に御挨拶あって、ここに事は終る。

尽きない想い出の結句として、私はかつて麗しかった日本の星空にふさわしい讃歌を探してみた。17世紀に集成された首里王府の神歌集「おもろさうし」534 がふさわしく考えられる。薔蒼とピロウの茂る御嶽^{うたけ}にて徹夜の神儀を終えたノロ（神女）団がホッとして、やがて白らみはじめる東天に向けて吐露した率直な情景らしく、一句毎に感動のえけ（アレ）がつく。万事、女性だけの秘儀であれば詳細は知る由もないが、徹夜の観測を終えて迎える暁前の我々の心境に通ずるものがあるように思われる。

- えけ 上がる三日月や
- えけ 神ぎや金真弓^{(丸)かな}
- えけ 上がる赤星や
- えけ 神ぎや金細矢^{まきぎ}
- えけ 上がる群れ星や
- えけ 神が差し櫛
- えけ 上がる貫ち雲は^の
- えけ 神が愛きき帯^ま

(『おもろさうし』, 岩波版 1972年)



カラーアルバム

星空の四季

藤井旭著

B5変型判 / 148ページ / 定価二,〇〇〇円(〒一四〇)

好評発売中!

日本の都市の夜空から星が消えつつある今、紙上に美しい星空をカラー印刷で再現。春夏秋冬の星座と、よく知られている星雲星団を、順に追って紹介。

〈主な内容〉

- 冬の星座——こぐま座・北斗七星・おおぐま座・M82・りょうけん座M3・M51・しし座のながま／他
- 秋の星座——さそり座・M6M7・いて座・南斗六星・三裂星雲・M8とオメガ星雲・夏の銀河／他
- 夏の星座——カシオペア座・カシオペア座と北極星・ケフェウス座の銀河・NGC6946・M31／他
- 春の星座——オリオン座・オリオン星雲・プレアデス星座／他